

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12910

研究課題名（和文）古文辞派詩の新研究

研究課題名（英文）The Ancient Rhetoric School in East Asia

研究代表者

高山 大毅（Takayama, Daiki）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00727539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は近世日本の古文辞派の詩を研究し、次のような成果が得られた。1. 古文辞派の詩の選集・注釈の分析とデータベース化を行い、『明七才子詩集』の入力データを完成した。2. 古文辞派内部の詩風の差異を検討し、徂徠学派の中でも高野蘭亭など一部の詩人のみが使用する詩語の存在が明らかになった。3. 和歌研究の手法を導入し、近江の「鏡山」を詠じた詩を通史的に検討した。徂徠学派の「鏡山」を詠んだ詩は、言葉の連想を重視したものであることが明らかになった。古文辞派の言葉の連想を軸とする文学については韓国漢文学会で発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

荻生徂徠及びその門人を中心とする江戸期の古文辞派の漢詩については、従来、千篇一律で魅力に乏しいといった評価が下されることが多かった。本研究は、江戸期の古文辞派が重視した明詩の選集をデータ化し、彼らがどのような詩を模範にし、詠作を行っていたかを丹念に検討した。これによって同じ古文辞派の詩人でも詩風の差異があることが明らかになった。また荻生徂徠らが、李攀龍の詩と和歌の二つに基づいた地名表現を行っていることが分かり、古文辞派の表現技法の魅力を示すことができた。以上のような古文辞派の詩の再評価は、これまでの近世日本文学史理解の図式の変更に繋がるものといえる。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the poetry of the ancient rhetoric school (古文辞派) in early modern Japan, yielding the following results: 1. A comprehensive analysis and database of the poetry collections and annotations from the ancient rhetoric school were established. The data input for "The Poetry Collection of the Seven Literati of the Ming Dynasty (明七才子詩集)" was successfully completed. 2. An examination of the differences in poetic styles among the poets of the ancient rhetoric school revealed the unique expressions employed by certain poets, including Takano Rantei. 3. The technique of waka poetry research was introduced, and a general historical review of poems about "Kagamiyama (鏡山)" in Omi, Japan, was conducted. It was determined that the poems composed on "Kagamiyama" by the ancient rhetoric school were based on word associations. Additionally, a presentation on the literature based on these word associations was delivered at the Korean Association of Hanmunhak.

研究分野：近世日本文学

キーワード：荻生徂徠 江戸漢詩 徂徠学派 古文辞学

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、古文辞派の詩文の研究には二つの新たな潮流が見られた。

第一には、徂徠学派の修辞技巧に関して和歌・俳諧に類似していることを指摘する研究である。宮崎修多「江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見」(笠谷和比古〔編〕『十八世紀日本の文化状況と国際環境』、思文閣出版、2011年)、胡正怡「地名表記から見る漢詩の作り方——古文辞派を中心に」(『国語国文』第82巻、11号、2013年)がそうであり、文に関しても、澤井啓一は、特定の典故を「背景」に据えて叙述を展開していく徂徠の文章を、狂言作者の「世界」の選定や和歌の「本歌取り」になぞらえて説明している(澤井啓一「解説——方法としての古文辞学再考」、澤井啓一・岡本光生・相原耕作・高山大毅『徂徠集 序類』第二巻、平凡社、2017年)。これらの研究は、徂徠学派の詩文は「日本的」要素を徹底した排除したと見る従来の文学史理解に疑義を呈している。筆者もこのような研究を推し進めてきた一人であった(高山大毅「荻生徂徠『絶句解』 古文辞派の道標」、井上泰至・田中康二〔編〕『江戸文学を選び直す』、2014年)。

第二には、朝鮮通信使の詩文に注目し、朝鮮朝の明代古文辞派受容と近世日本の受容を比較する研究である。康盛国「朝鮮通信使の日本漢詩批評『梅所詩稿』の申維翰序文をめぐって」(『語文』第99号、2012年)や、藍弘岳「徂徠学派文士と朝鮮通信使」『日本漢文学研究』第9号、2014年)などの研究が挙げられる。明代古文辞派の詩文は、朝鮮朝でも受容されており、古文辞派の問題は東アジアに視野を広げて検討すべきであることをこれらの研究は示している。筆者は、2017年8月にジョイント・ワークショップ「東アジアの思想と文学+ : 古文辞派を考える」での盧京姫「朝鮮の擬古文派(秦漢古文派)と近世日本の古文辞派——韓国における研究の現状と展望」のディスカッションを務め、朝鮮朝の古文辞派受容について知見を深め、比較研究の重要性を認識させられた。

## 2. 研究の目的

本研究は、東アジア諸地域を視野に入れながら、古文辞派詩の特徴について、実作に即して内的に理解することを目的とした。

本研究の独自性として、第一に挙げられるのは、古文辞派の諸作の精密な読解に基づいた分析を行うことである。文学研究において精密な読解は「当然のこと」であると思われるかもしれないが、典拠表現を多用し、凝縮した表現を好む古文辞派詩は、難解であることが知られ、彼らの実作に立脚した研究は存外に少ない。詩自体ではなく、古文辞派自身と敵対者の文学論に見える言辞を踏襲して、古文辞派の文学について論じる傾向がいまだに見られる。当時の古文辞派作品の注釈を基礎にすることで、「当然のこと」ができる水準まで研究を引き上げたい。

独自性として第二に挙げられるのは、徂徠学派らの古文辞派受容の特色について、江戸期の文学状況と他地域との比較の両面を視野に入れて検討することである。江戸期の古文辞派受容については、他地域と比較した際に浮かび上がる特徴と、その特徴の背景となっている近世日本文学のあり方の二つを併せて見ていく必要がある。本研究は、この二つの観点から江戸期の古文辞派受容について分析する点で、従来の研究とは異なっている。

本研究は、これまで研究が立ち遅れていた領域を扱うことで、研究上の空白を埋めるだけでなく、近世日本文学史あるいは東アジア文学史の認識を一新する可能性を有している。江戸中期は古文辞派の文学が流行しており、古文辞派に対する理解が変化すれば、以前・以後の時代の漢文学の理解も連動して大きく変化する。また、漢文学に限らず、たとえば賀茂真淵や蕪村といった人々の漢詩観は、古文辞派に規定されており、古文辞派の再検討は、和文脈や俳諧の研究にも新たな知見をもたらす。つまり、古文辞派研究は、江戸文学史の大きな書き換えへと繋がるのである。

## 3. 研究の方法

本研究では、次の三つの視点から分析を進めた。

古文辞派文学の選集・注釈の分析とデータベース化

近世日本においては、古文辞派の詩文は、『明七才子詩集』(『国朝七子詩集註解』)・『絶句解』といった選集を経由して受容されていることが多い。中国で編纂された『明七才子詩集』は和刻され、一時期は『唐詩選』と並び称されるほど広く読まれた。しかし、古文辞派の詩の読解において該書は十分に参照されているとはいえない。また、『絶句解』は荻生徂徠によって編纂された古文辞派を中心とする明詩の注釈付き選集であり、江戸期の古文辞派受容を考える上では非常に重要な著作である。しかし、『絶句解』についても筆者の研究を除いては、研究がない状況が続いている。そこで、近世日本・中国における古文辞派普及の実態について明らかにするために、『明七才子詩集』『絶句解』の分析を及びデータベース作成を行った。

古文辞派内部の詩風の差異に対する検討

古文辞派の文学は、擬古主義で千篇一律であるとしばしば評されてきた。そのため個人の詩風の差異について研究がなされてこなかった。しかし、江戸中期の文献などには、詩人間の文学傾向の相違への言及が見られる。また、筆者は研究開始時点で、古文辞派詩の縁語掛詞的表現や、地名・人名にちなんだ表現に関して、既に研究を進めており、これらの表現技法に着目することで、個人の詩風の特徴は析出可能であるという手ごたえを得ていた。そこで、この研究を発展さ

せ、古文辞派内部の詩風の相違を明らかにすることにした。古文辞派でも特定の詩人しか用い  
の表現が存在することが分かれば、その有無に注目することで、影響関係について精度の高い研  
究を行うことが可能になる。従来、古文辞派の影響を受けているか否かの判定基準は曖昧であり、  
東アジア各地域での古文辞派受容の比較研究においては、そのことが障碍となってきた。本研  
究はこの問題の克服にも有益であると考えた。

#### 和歌研究の手法の導入

古文辞派詩には、掛詞や縁語と近似した表現が見られる。もともとは歌人であった服部南郭な  
ど、徂徠学派の学者は和歌や俳諧に通じており、彼らが明代古文辞派を受容する際に、和歌の知  
識は重要な足掛かりになったと考えられる。

和歌研究の表現研究の蓄積に比して、古文辞派詩の表現についての研究は少数に止まる。そこ  
で、歌語の歴史の変遷などに関する和歌研究の手法を古文辞派詩の研究に導入した。和歌研究の  
方法を漢詩研究に応用するという発想は奇異に思われるかもしれないが、漢詩に関して「歌枕」  
に相当する概念がなかったため、「詩跡」という概念が創出されるなどの先行事例が存在する(植  
木久行〔編〕『中国詩跡事典』、研文出版、2015年)。表現論の分析概念や手法について、漢詩研  
究が和歌研究に学ぶべき点は多くある。

歌語・歌枕に関する研究と同じように、古文辞派の詩語や定型表現が分析可能であることを明  
らかにし、中国・朝鮮の古文辞派系統の詩の検討にも輸出可能な分析概念や分析手法の確立を目  
指した。

#### 4. 研究成果

上記の研究計画の三点それぞれについて研究成果を記したい。

##### 古文辞派文学の選集・注釈の分析とデータベース化

『絶句解』・『唐後詩』・『明七才子詩集』を取り上げて研究を行い、『明七才子詩集』の入力  
データは完成した。研究期間中に、荻生徂徠の御子孫から、荻生家伝来の史料が東京大学駒場図  
書館に寄贈された。寄贈史料の中には、『絶句解』・『唐後詩』の稿本が含まれており、『絶句解』  
『唐後詩』の編纂過程について稿本に基づき、分析を行った。両者の編纂の経緯については、研  
究期間中に論文を発表することはできなかったが、今後、他の荻生家伝来史料とともに、その文  
学研究上の価値について、論文は発表したいと考えている。『明七才子詩集』のデータに関して  
は、今後、何らかの形で公開することを考えている。

##### 古文辞派内部の詩風の差異に対する検討

研究期間開始前に発表した、「古文辞派詩の修辞技法——縁語掛詞的表現と名にちなんだ表現」  
(『国語国文』89巻2号、2020年)を基礎に古文辞派の表現技法について検討した。上記の研究  
の中で、縁語掛詞的表現の問題が複数の典拠表現を連結する表現の問題と関係していることが  
分かり、典故の連結に着目して検討を進めた。

漢詩では、典故に基づき「明月」で「珠」を修飾する表現がしばしば用いられる(「明月珠」)。  
興味深いことに古文辞派の詩では「珠」ではなく「璧」を「明月」の語で修飾する例(「明月璧」  
など)が見られ、高野蘭亭の詩に顕著に多い。これは「明月珠」と「連城璧」という二つの典拠  
表現を結び付けたものと見ることができ(徂徠学派でもこの種の表現に疑義を呈する人物や、  
あるいは全くこの種の表現を用いない人物もいる)。高野蘭亭が好んでこの表現を用いた背景に  
は、師の荻生徂徠が蘭亭に宛てて詠んだ詩の中で、「明月珠」「連城璧」の連結表現を使用したこ  
とがあると考えられる。これについては、高山大毅「「明月璧」と高野蘭亭」(『日本中国学会報』  
第72号、2020年)で発表した。この研究を通じて、徂徠学派における「名づけ」の問題の重要  
性が浮かび上がり、今後の研究に新たな展望を得た。

徂徠学派の詩風の問題に関連し、徂徠学派の文学論について「共感」と称される感情の分類と  
いう観点から検討を加えて、「江戸時代の情の思想」(『世界哲学史6』、筑摩書房、2020年)とし  
て発表した。

#### 和歌研究の手法の導入

和歌研究では歌枕に関わる表現の分析の蓄積が豊富にある。そこで、それにならい、近江の鏡  
山を「石鏡」と呼称する表現について、用例を集めて通史的に分析した。鏡山を「石鏡」と呼称  
することは荻生徂徠に始まるものであり、類似の内容である李攀龍の詩と『古今和歌集』所収の  
歌の二つを踏まえたものである(李攀龍の詩と和歌の連結表現と見ることができ)。徂徠が創  
出した「石鏡」=鏡山という定型表現は、徂徠によって日本の漢詩文の歴史に画期がもたらされ  
たという「物語」を背景にして浸透し、徂徠学派はその定型を継承しながら、他の典故とも結び  
つけることで、新たな趣向を開拓していった。ただし、徂徠学派の退潮とともに、鏡山をめぐる  
表現にも変化が見られるようになる。以上のような分析を通じて、徂徠学派が言葉の多義性や  
類似に基づいた表現を好む一方で、視覚的描像に対しては関心が稀薄であることが明らかにな  
った。時代が下るにしたがい、鏡山を詠んだ詩も、鏡山の視覚的描像を取り上げるものが増える  
のである。視覚的描像に対する関心の乏しさは、天明狂歌などにも当てはまる特徴であり、18世  
紀日本の文学を考える上で興味深い論点であると思われる。以上の研究は、高山大毅「「石鏡」  
=鏡山詠の展開：徂徠学派の定型表現」(『雅俗』21号、2022年)として発表している。

徂徠学派の詩が言葉に基づく連想を重視することについて、散文も含めて考察し、韓国漢文學會「日本古文辭派研究：荻生徂徠の散文と奇想」として報告した。オンライン開催の学会であったが、韓国の古文派研究者と意見を交換し、縁語・掛詞に近似した言葉に基づく連想は、朝鮮朝では余り用いられていないという意見を得た。本研究は、東アジアの他地域を視野に入れて研究を行うことを目標としたが、上記の韓国漢文學會の報告で、それについても成果を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高山 大毅	4. 巻 21
2. 論文標題 「石鏡」= 鏡山詠の展開 徂徠学派の定型表現	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雅俗	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高山大毅	4. 巻 72
2. 論文標題 「明月壁」と高野蘭亭	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 191-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高山 大毅
2. 発表標題 日本古文辭派研究：荻生徂徠の散文と奇想
3. 学会等名 韓國漢文學會第13回全國學術大會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------